

田根 剛さん (建築家)

場所の記憶から建築を考える

エストニア国立博物館を設計し、新国立競技場のコンペでもファイナリストに選ばれた田根剛さん。二〇一四年に東京で開かれたインスタレーション「LIGHTS TIME」では約七万二千人の来場者を迎えるなど、さまざまな分野で活躍する。建築家として、大切にしているものとは？

北海道にあこがれて

——建築家を目指すきっかけは何だったのでしょうか？

本当にたまたまです。幼いころからサッカー漬けの毎日を送っていて、高校までJリーグのユースチームに所属し、プロ選手を目指していました。でも当時のチームメートにはいままも日本代表でプレーする阿部勇樹選手や佐藤寿人選手がいて、どう頑張っても超えられない壁がある、サッカーの道はあきらめなくては

と感じていました。東海大学付属浦安高校に通っていたので、進路を決めるにあたって、旭川にあった北海道東海大学(当時)の芸術工学部が目に残りました。芸術と工学を一つにした学部なんて、なんだかっこいいじゃないですか。建築を勉強したいというよりも、北海道の大自然にあこがれて決めたようなものですが、実際に勉強し始めたら建築がすごく面白かった。ラッキーだったと思います。

——大学時代に何度か海外にも行かれていますね。

海外の建築を見たいと思う、二年生のときにスペイン、イタリア、フランスと一ヵ月かけて巡りました。

日本とは異なる重厚な建築や、建築が街をつくり、歴史をつくる姿に魅了され、三年生のときには大学が協定を結んでいたスウェーデンのヨーテボリにあるHDKに留学しました。いきなり知り合いが一人もいない

国に住み始めたのですが、サッカー漬けの生活を送っていたので、当然、英語なんてしゃべれない。いままも言語は得意ではありませんが、生活しながら少しずつ覚えていきました。

——HDKではどのような勉強を？

デザインの学科に籍を置き、家具やインテリアを学びました。しかしそのうちに、どうしても自分は建築

が好きなのだと感じて、途中で市内にあったシャルマス工科大学の建築学部で留学先を変えました。

——自分で交渉して、ですか？

そうです。見学に行ったときに、「ここで学びたい」と、違う建築に対する教育を見て、「ここで学びたい」と、勝手にポートフォリオをつくって持って行きました。「どうしてもここで勉強したい」と訴えて、残りの半年をそこで過ごした。ヨーロッパのさまざまな国の人が集まって、建築というものを共有しながら互いの考えやデザインの発想を競う、たくさんの刺激を受けた、本当に楽しい毎日でした。

——大学卒業からすぐにエストニア国立博物館の国際設計コンペティションで最優秀賞を受賞、二十六歳での快挙でした。

卒業後、デンマーク王立芸術アカデミーの客員研究員を経て、デンマークやイギリスの建築事務所を経て、経験を積んでいたとき、エストニアの独立十五周年を機に、国家としてのアイデンティティや未来に対するビジョンを表現してほしいという国際設計コンペティションを知りました。のちに共同で事務所を設立するイタリア人のダン・ドレルと、レバノン人のリナ・ゴットメ



●たね・つよし 1979年東京生まれ。北海道東海大学芸術工学部建築学科卒業。2006年にパリを拠点にDGT.を設立。2月7日まで東京で開催された「建築家フランク・ゲーリー展」をプロデュースした。
©Alexandre Isard

* 6月22日～26日まで旭川家具センターで開催される「ASAHIKAWA DESIGN WEEK 2016」には道産の木材を使ったインスタレーション作品を展示予定。